

の類古き物語にならしけりといふ事見えたり、今世女の詞におならをすると云は是れなり、

〔松屋筆記 九十六〕屁を奈良といふ、オナラ、アヤマリ、

今俗放屁をおならといへり、おもじは、女房詞の敬辭なり、奈良は鳴の通音なり、ヒル音によりていへる詞也、舊本今昔廿八の十語に、武員僧ノ御前ニ蹲に、久ク候ケル間ニ、錯テ糸高ク鳴シテケリと見ゆ、

〔大鏡 左大臣時平〕此左大臣、時もの、おかしさぞ、えねんせさせたまはざりける、わらひた、せ

給ひぬれば、すこぶる事もみだれけるが、北野道眞菅原によをまつりごたせ給ふあひだひだうな

る事おほせられければ、さすがにやむごとなくてせちにし給ふ事をば、いかゞはおぼして、このおとゞのし給ふことなれば、ふびんなりとなげき給ひけるを、なにがしの史が〇史が原作す

ことにも侍らず、そのれがかまへにて、かの御事をとゞめ侍らんと申ければ、いとあるまじき事、

いかにしてかはなむとの給はさせけるを、たゞ御覽せよとて、ざにつきて、ことさびしくさだめの、まゝり給ふに、この史、ふむばさみにふみはさみて、いらなくふるまひて、このおとゞにたてま

つるとて、いとたかやかに〇〇〇〇して侍りけるに、おとゞ、ふみもえとらずして、わな、きて、やがて

わらひて、けふはすぢなし、右のおとゞ〇道にまかせ申とだにいひやり給はざりければ、それに

こそすがはらのおとゞの心のまゝにまつりごち給ひけれ、

〔福富草紙〕ふくとみは七條のぼうのとね也、この秀武といふやつのするさうをたゞ殿原めでさせ給うなりすやつは福富のかたはしをおしへたるをだに、殿原はめでさせ給なり、ましてふくとみははしなれおさめのてをたて、ひる、つゞけんは、殿原はめでさせたまひなんと申といへば、いそぎて、ましに入ぬれば、めしをまちて、たてる程に、いぬ打のかたにむかひて、秀武がおしへつるやうに、かうくゝていはうひちくゝと三たびねうじたてり、